

かほくがた

河北潟湖沼研究所通信 Vol.12 No.3



馬渡川での活動状況を確認する参加者



冬期湛水水田で水張りの方法について説明を受ける



冬期湛水水田の畦で見つかったキツネの糞



湖岸堤防での野鳥の観察

舟入保全プロジェクトの実施現場を視察

2月4日におこなわれた第52回河北潟自然観察会は、昨年9月から11月にかけておこなわれた「環境省ふれあい湖沼モデル事業・舟入川保全プロジェクト」の成果視察を兼ねて、活動のおこなわれた馬渡川での観察をおこないました。十数名の参加者で馬渡川を歩いてみてまわりました。以前と比べ水の通りが良くなった水路は、見た目の水質も良くなり何となくいきいきした水辺に変わったように感じられました。

馬渡川の視察が終わったあとは、金沢市八

田町の方が冬期湛水水田をおこなっている場所を見せていただきました。水を溜めるために個人でポンプを購入して、毎日稼働させているということでした。今年は雪がなく、冬期湛水水田の効果がまだ十分には確認されておりませんが、水鳥だけでなく、今後さまざまな水生生物が現れてくることが期待されます。

最後に湖岸堤防より野鳥の観察をおこないました。次回の河北潟自然観察会は4月1日におこなわれる予定です。

第3回 タニシ



河北潟周辺の田んぼや農水路には、マルタニシとヒメタニシという2種類のタニシが生息しています。マルタニシは成貝では通常は40mmくらいの大きさになり、殻の周辺は丸みを帯びています。冬でも適当に湿っている水田や農業用の土水路などに生息します。ヒメタニシは、通常20～30mmくらいですが、河北潟ではもっと大きくなるものもいます。殻の角が角張っていて、小さいときはそろばん形ですが、成長すると太めの角のようになります。多様な環境に生息し、コンクリートで護岸した水路や水質があまり良くないところにも棲んでいます。

現在、河北潟地域でみられるタニシのほとんどはヒメタニシで、マルタニシはあまりみられません。最近の調査(野村・高橋, 2006)では、ヒメタニシが確認された地点が32地点であったのに対して、マルタニシは5か所だけでした。マルタニシは、環境省の準絶滅危惧種となっていますが、河北潟でもかつては普通にみられたものが、圃場整備や水質悪化に伴って、ほとんど生息しなくなっているようです。

昔、河北潟の潟縁に暮らす人たちは、タニシを大豆と一緒に煮たりして食べていたようです。農文協が「聞き書き石川の食事」という本を出版しておりますが、河北潟潟端地区の食事の紹介として、「潟周辺の田んぼでは、稲刈りの終わったあとに、たにしがごろごろとこがっている。大きな竹かごいっぱいもひろうことがある。春先にも、雪が解けて田の水が温かくなると、たにしが顔を出す。こうして、春と秋の二度、たにしを食べることができる」と書かれています。また、潟端在住の坂野巖さん(77歳)によると、「タニシはフゴとよばれるぬかるんだ田んぼでたくさんとれた。まるくて大きくなるタニシで、田んぼには大きいものも小さいものもいたが、食べ応えがある大きいものを選んでとっていた。水路には色の違う小さなタニシがいたが、そのタニシはあまり見

かけなかったし、食べなかった。」ということです。ご本人に図鑑で確認いただきましたが、田んぼにいて食べられていたのは、マルタニシで間違いなさそうです。

昔とくらべて、マルタニシは著しく数が減ったのは明らかです。一方、ヒメタニシは数の増減は不明ですが、環境が変わった中でも、今のところしぶとく生き残っています。もともと中国からもち込まれたものとする説もあるようです。一方、北米に移入されたマルタニシは、各地で繁殖して問題となっているようです(フリー百科事典「ウィキペディア」による)。

(文:高橋 久)

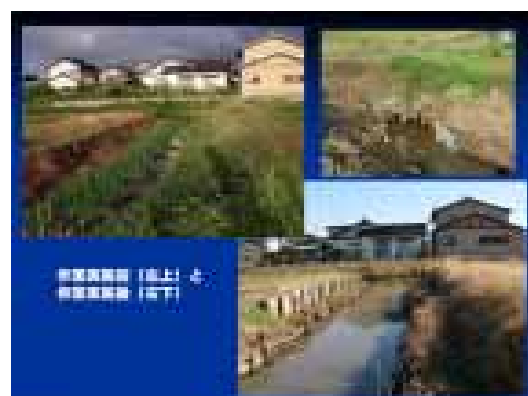
平成18年度環境省いきづく湖沼ふれあいモデル事業 舟入川保全プロジェクトシンポジウム報告

平成18年9月から3回にわたって実施された金沢市木越の馬渡川における「舟入川保全プロジェクト」の成果報告を兼ねたシンポジウム「舟入川保全プロジェクト - 河北潟の水辺を守るためには - 」が、2007年2月4日いしかわ環境パートナーシッププラザにおいて開催されました。プロジェクト参加者を中心に約30名が参加し、活発な討論が繰り広げられました。

シンポジウムでは、最初に高橋久理事より「これから河北潟の自然とどのようにつきあっていくか」というタイトルで、プロジェクトの成果報告と問題提起がおこなわれました。今回の事業を実施する背景について、河北潟の自然や地域の特徴と現状の点から、パワーポイントを使って説明されました。河北潟の自然や地域は、もともと住民による潟への強い作用があって成り立っていたものであること、とくに干拓前の湖岸では、河北潟をより使いやすくするために網の目のように舟入川が掘られており、それが野生生物にとっても重要な水域ネットワークとなっていた可能性があること、また、舟入川は、より利用しやすい河北潟をつくるために、住民が深く関わって成し遂げられた当時の土木事業のひとつであり、河北潟における人為的改変により創り出された二次的自然の代表である、ということが述べられました。



シンポジウム会場の様子



パワーポイントの一枚

一方で、近年の河北潟干拓事業は、河北潟をなくすことによって河北潟地域を豊かにしようとした大規模な土木事業であるが、自然を完全に征服することは難しいことから、河口域の低湿地であるという河北潟地域の自然の特徴と事業の目的との間に矛盾が生じていること、そのために、水質悪化や農作物への鳥獣被害、外来種問題、水位管理の難しさなどのさまざまな問題が表面化しているとみることができる、と述べられました。

今後、河北潟とどうつきあっていくかということでは、まずは河北潟地域と河北潟が切っても切り離せないものであるということを受け入れること、潟の自然を受け入れた上で河北潟とのつきあいを考えていくことが必要なのではないか、と話されました。そして、住民が参加できるような新しい土木事業の形態である自然再生事業が求められること、ま

3 ページのつづき

た、自然再生事業は、土木工事への比重よりも計画や管理に重点がおかれるべきであること、その中での住民の役割が重要であることが強調されました。

今回の活動の成果としては、馬渡川とその支流のチクゴスズメノヒエを除去するとともに手作業でできる範囲の水路の補修をしたことにより、水の流れが良くなり、とくに見た目においての水質や水辺の改善効果が確認されたことが報告されました。チクゴスズメノヒエの除去量は約1トンであったこと、狭い場所での水草の運搬に適した新しい道具が開発されたこと等もあわせて報告されました。今後の課題としては、遠くの市民だけでなく近くの住民がより参加できるような活動形態を追求する必要があると述べられました。

後半は、参加者相互のざっくばらんな討論をおこない、今回の活動の意義や成果についてなごやかに意見交換をおこないました。泥だらけになり機械に頼らない作業を不合理とは思われなかったかという主催者側からの質問に対しては、実際のプロジェクトに参加した人から、そのような考えはもたなかった、むしろ充実感の方が高かった、作業自体が面白かった、水辺について考える上では実際に泥まみれになるのはとても良い、などの意見が出されました。一方で、地域住民の関心が低い、宣伝が足りないのではないかと、行政をもっと巻き込んでモデル事業ができないか、といった意見が出され、充実したシンポジウムとなりました。



10月の活動の様子

お知らせ

河北潟クリーン作戦の日程について

4月実施が恒例となってきました河北潟クリーン作戦（河北潟自然再生協議会主催）ですが、今年は、統一地方選などがあるために6月の開催となりました。ご協力のほどよろしくお願いたします。次回の「かほくがた」でもう少し詳しいお知らせを致します。

日時 2007年6月10日（日）

9:00～10:00（小雨決行）

集合場所 河北潟湖沼研究所の担当は、内灘町部分です。集合場所は、旧内灘大橋北詰の空き地です

第2回河北潟市民学校開催される

2006年12月3日、県NPO活動支援センターにおいて、約20名の参加のもと、第2回河北潟市民学校が開催されました。講師は河北潟湖沼研究所理事の大串龍一金沢大学名誉教授で、「地球の縮図イースター島」と題して、南太平洋中で最も隔離された孤島であるイースター島がたどった繁栄と衰退の歴史について、生態学的、社会学的観点から考察されました。そして、日本のイースターとも称することができる宮古島の歴史についてもふれられました。この講演の内容は、近々発行される「河北潟総合研究」第10巻で詳しく紹介されています。

お年玉年賀ハガキ助成金について

このたび、河北潟湖沼研究所では、日本郵政公社の「平成17年度寄付金付お年玉年賀ハガキ助成金」を得、水流計測ソフトを購入し18年、19年に計測を行いました。今後、継続して河北潟の水流のシミュレーションを行うことができるようになりました。水の動きを見ることで河北潟の環境変化を観測することが可能となりました。

「かほくがた」 VOL.12 NO.3

2007年2月14日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435